

No. 教研博論内-9

早稲田大学大学院教育学研究科

博士学位論文審査要旨

【申請者】

氏 名 古市 将樹 (1963年5月14日生)

専攻・研究指導 教育基礎学専攻・社会教育学 I 研究指導
1995年4月 1日入学
2001年3月31日退学

論文題目

土田杏村の社会教育学に関する研究
—教育観の転換の構造—

申請学位 博士 (教育学)

受理年月日 2001年11月20日 (課程による者の学位論文)

論文審査終了年月日 2002年 5月28日

【審査員】

主任審査員氏名 大槻 宏樹 教授
審査員氏名 朝倉 征夫 教授
審査員氏名 長田 三男 早稲田大学名誉教授

2002年6月25日の教育学研究科委員会にご持参願います。

博士論文審査要旨

申請者 古市将樹（教育学研究科博士後期課程修了）

論文題目 土田杏村の社会教育学に関する研究
—教育観の転換の構造—

主査	早稲田大学教授	文学博士（早稲田大学）	大槻宏樹
副査	早稲田大学教授	博士（文学）早稲田大学	朝倉征夫
副査	早稲田大学名誉教授	文学博士（早稲田大学）	長田三男

1. 本論文の意図と構成

本論文は、社会教育史上に注目されてきた自由大学運動の理論的指導者として認められながら、従来比較的未拓の分野である土田杏村の社会教育学を分析の対象とし、彼の教育観の転換の筋道を精緻に検討しようとした意欲的な研究である。

杏村と同時代の社会教育論者としては、乗杉嘉寿・江幡亀寿らの行政社会教育論、川本宇之介・吉田熊次らの翻訳的社会教育論、大山郁夫らの時流批判としての社会教育論等があるが、「社会教育学」を構築したのは、戦前においては土田杏村のみである。

西田幾多郎門下として新カント派を中心とする哲学を学んだ杏村は、社会問題について哲学的思索に基づいた批判を数多く提出している。それは社会改造論としての教育論の展開としてあらわれ、「教育」そのものを「社会教育」とみる新しい教育観に連なっていった。

本論文の構成に当たり、著者が土田杏村の教育観の転換に注目した動機は、I

・イリイチの教授的諸行為としての「教育」がもつ言葉の意味論的成立から見直す歴史的検証への考察に対する着目であった。著者は杏村もイリイチの視点と共通する問題意識をもちつつ、さらにその問題解決のための実践を通じた理論化をすでに試みている点に現代的意義を見出している。ここに本論文に独自な特徴の一面がある。

本論文は、この概念分析の視座の確保に関する研究から杏村に着目し、彼の文化主義、人格主義、理想主義、社会教育学のそれぞれの柱を建て、その教育観の転換の構造に迫るものである。

本論文の構成は以下の通りである（項までの記載とした）。

序論

本論

第一章 土田杏村の教育観の転換の現代的意義 —イリイチを例とした概念分析

の視座の確保の必要性—

第一節 スクーリング批判

第二節 ホモ・エデュカンドス批判

第三節 自己循環する教育概念

第二章 土田杏村の「使命」自覚への過程

第一節 幼少年時代 —「つよい決心」をもつ「神童」—

第二節 新潟師範学校時代 —懐疑的思考の萌芽—

第三節 東京高等師範学校時代 —「他ヲ軽視スル」杏村—

第四節 東京高等師範学校卒業から京都帝国大学進学までの時期 —アイデンティティの危機—

第五節 京都帝国大学時代 —「使命」の自覚によるアイデンティティの再構築—

第三章 杏村の問題認識と文化主義の提唱

第一節 大正期の日本のアカデミックな哲学界の状況

第一項 アカデミックな哲学界における流れ

第二項 カント哲学 —認識の「形式」—

第三項 ヘーゲル哲学 —認識の発展—

第四項 新カント派の哲学

第五項 日本の哲学界におけるカント —新カント派の哲学の受容—

第六項 カント哲学とヘーゲル哲学に対する杏村の評価

第二節 杏村の原初的な問題意識と二つの基本姿勢

第一項 創作としての評論

第二項 評論の具体と抽象

第三項 抽象から具体へ —概念の具体化—

第四項 具体的問題解決のための「公準」としての愛 —価値の創造—

第五項 無批判な価値 —人道主義者の欠陥—

第三節 「神秘的象徴主義」と『象徴の哲学』に示された杏村の認識論

第一項 「体験の世界」を看過した一般的な現実認識

第二項 杏村の認識論上の立場としての「神秘的象徴主義」

第三項 文芸上の「神秘的象徴主義」

第四項 杏村による「神秘的象徴主義」の哲学史上の位置づけ

第五項 『象徴の哲学』に示される杏村の認識論 —「あるがまま」の見方の論理的説明—

第四節 杏村の文化主義

第一項 大正文化主義について

第二項 杏村の基礎的認識 —文化が必要な現状—

第三項 杏村の「文化」概念

第四項 杏村の〈文化主義〉

第四章 杏村の社会改造論の根底にある人格主義と理想主義

第一節 杏村の人格主義

第一項 社会改造論の一般的な傾向と哲学への期待

第二項 文化についての杏村の価値的見方と事実に見方

第三項 人格概念の移入と求められる人格

第四項 阿部次郎の人格主義

第五項 杏村の人格主義 ー阿部の人格主義への批判からー

第六項 人格の「自由」と「奉仕」

第二節 杏村の社会概念と国家概念

第一項 社会への注目とその概念の不在 ー「社会」概念に関する当時の状況ー

第二項 先行研究における杏村の「社会」概念分析

第三項 杏村が分析する「社会」概念 ー人格の論理的成立ー

第四項 教育目的論における個人と社会の対立 ー理念としての社会概念からみた対立の本質把握ー

第五項 杏村の「国家」概念分析

第六項 社会と国家 ー多元的社会観における社会と国家の関係ー

第三節 杏村の理想主義

第一項 社会批判の観点としての理想社会

第二項 杏村の社会改造論の根底にある理想主義

第三項 理想主義に対する批判への杏村の反論

第四項 社会改造論における理想主義の必要性 ー理想主義の根底にある人格主義ー

第五章 杏村の社会教育学

第一節 教育に関する杏村の批判的認識 ー教育目的論の必要ー

第一項 杏村の批判的社会認識

第二項 教育の諸問題

第三項 教育目的論の必要 ー目的の独特な性質ー

第四項 日本の教育思潮に関する批判

第二節 プロレットカルトの導入

第一項 杏村の考える教育の目的

第二項 批判的教育学について

第三項 批判的教育学の欠点

第四項 杏村の求める批評的態度

第五項 杏村の教育観を支えるプロレットカルト

第三節 杏村の社会教育学

第一項 社会教育に対する杏村の批判

第二項 「社会教育学講座」の特徴

第三項 社会教育学が成立する根拠

第四項 教育の意義と理想

第五項 社会教育学の根拠としての自由大学

第六項 杏村に関する先行研究の現状 —教養主義の問題をめぐって—

結論

資料目録

2. 各論にかかわる論評

(1) 第一章では、土田杏村の教育観の転換がもつ現代的意義を考察するに当たって、イリイチを例としている。

イリイチのスクーリング批判の中心は、スクーリングが諸個人の自律性を他律性一元化することであった。それを象徴するのが潜在的カリキュラムに基づく「価値の制度化」であった。イリイチはスクーリング批判の展開の中で、教育の自明性を検討する過程で教育の歴史性へ眼を向ける。ここに教育を教授的諸行為として諸個人の生活に必要な自明のものとする人間のあり方を問題としたホモ・エデュカンドス批判への深化を論述している。

イリイチがみた教育の自明性の歴史研究は、既成概念の「外部」獲得の可能性をもってしたが、自己循環する教育概念に収斂されている。杏村はイリイチの教育理解と同様の枠組みをもってしたが、杏村の「外部」獲得の可能性については、むしろ実践的理念的構造転換をすでにもっていた点に、著者は現代教育の課題を

見出している。

(2) 第二章では、土田杏村の自己形成との関わりから、「使命」自覚への過程について論述している。

杏村は新潟師範時代に、既成概念への懐疑を自らの思索の出発点とし、東京高等師範学校に進学する。自由な風潮に満ちたこの時期に、田中王堂の知遇を得て、本科3年時に『文明思潮と新哲学』を刊行する。とくにその一篇「サンヂカリズムの意義方法及び哲学」では、思想界・評論壇の注目を浴び、福原麟太郎をして「日本のルソー」とも云わしめた。

この間杏村は博物学より哲学へと傾斜し、京都帝国大学において西田幾多郎に師事する。哲学への学びの中で、人々の「客観的状況」と「主観的生活」のちがいに注目し、たとえ社会改造の成果により客観的状況が改善されても、「主観的生活」の変化をみないかぎり、真の社会改造にはなりえない状態への問いが、杏村のアイデンティティの確立につながっていく過程を論じている。

(3) 第三章では、杏村の社会問題への意識と自ら提唱した文化主義を詳論している。

第一節・第二節においては、大正期の日本のアカデミックな哲学界の状況を概観し、杏村が客観的現実を観念的に規定する時の論理的根拠や規定の限界を指摘したことについて論述している。その背景として、社会の改革者たらんと欲していた杏村には、一方で常に現実の具体的な社会問題の解決を目指す姿勢があり、もう一方で常に哲学的思索による問題解決策を考える姿勢があった。

第三節では、杏村の唱えた「神秘的象徴主義」と著作『象徴の哲学』に示された認識論を考察している。当時は一般に自然主義的あるいは自然科学的な現実認識が比較的優位であったが、杏村はより多様で複雑な体験の世界を考える。これが即ち神秘的象徴主義の原型で、個性的体験を固定的なものとみず、「あるがまま」に認識するものであった。『象徴の哲学』は、現象学の立場から「象徴」の意味を考察したものであるところから、象徴の現象学とも別称されていた。しか

し同時に『象徴の哲学』は副題として「文化学的研究」と銘打っているように、文化学と密接に結びつけているところに杏村の独自性があった。

そこで第四節では、杏村の文化主義を論じている。もともと文化主義は教養主義とともに大正期日本に登場した価値概念であった。しかし杏村の文化主義は人力によって自然をある目的理想に向かわせる作用過程であり、文化をもって社会生活の最高水準とする桑木巖翼の文化主義と相違し、文化価値の実現に努めようとする主義という意味を含んで文化価値主義ともいわれる左右田喜一郎の文化主義とも趣旨を異にしていた。杏村の文化主義は、自然と文化との理論的対立を基礎とし、むしろ自然主義に対しての文化主義であって、社会主義と理想主義との結合を内容としていた。ためにその文化主義は、社会改造論としての性格を内に強く潜めていたが、併わせて唯物論や唯物史観に立った社会改造論をも批判の対象となる。つまり杏村の文化主義にはそれを根底から支える人格概念を不可欠とし、人格概念こそを自然と文化の理論的対立を統一する根本原理とした。

(4) 第四章では、杏村の社会改造論の根底にある人格主義と理想主義を分析する。

第一節は、杏村の人格主義の分析であった。すでに述べたように、杏村は文化主義を標榜していたが、常に存在よりも価値が優れていると考えていたのみではなかった。すなわち文化に対しても、時には価値的見方が必要であり、時には存在の見方が必要であった。それらの見方を統一するのものが人格主義であった。杏村は、当時の存在一元的な風潮の中で、人格の意義を説く阿部次郎に同感している。しかし阿部の人格概念には、それが成立する論理的根拠、とくに社会概念と人格概念との関係が稀薄な点について杏村は難点を示す。

第二節では、杏村の社会概念を論じ、それと彼の人格主義の関係を分析している。当時の人格主義は一般に道德の立法者としての人格であり、自己自身を目的とする自律的な自由の主体としての人格に比類のない尊厳性を与えるものであった。杏村は通常的人格主義に対し、人格主義が成立する論理的根拠である社会概念と人格概念との関係を考慮に入れた人格主義であった。この関係を深めていく

ところに、より実践的かつ社会改造の色彩を強めた杏村の人格主義を詳細に論述している。人格主義を文化主義との相互関係性の面で捉えている点に著者の獨創性を評価できる。

第三節は杏村の理想主義への論述である。

新カント派による理想主義は、イ、現実をこえた価値を重点的に志向するために現実主義や自然主義と対立し、ロ、唯一の終局的価値を肯定するために懐疑主義と対立し、ハ、汎神論的決定観を排するために神秘主義と対立し、ニ、精神的価値に優位をおくために唯物論や功利主義とも対立するものであった。杏村の理想主義は理想を現実に対する批判の観点としていたために、現実の社会を批判することから始まる社会改造論の根底には、すべからく理想主義がなくてはならないと判断している。したがって杏村の理想主義は、見方の問題よりも見方に基づいてどのような判断や行為の選択をおこなうかということに重点をおいていた。このことの意味は、その選択をおこなうのは自律した判断の主体としての人格であるため人格主義とも呼応したものであった。

杏村に独自のこの文化主義、人格主義、理想主義は、当代におけるアナーキズムとボルシェヴィキズムの論争に対してむしろ両者の統合的な立場として絡んでいる点でも、彼の基本的姿勢であった。同時にこれらの思想が行動を伴う体系をもつため、杏村が社会思想上従来の知識人の立場に収まりきれないデアスポラとしての扱いを受けることにもなっている。この杏村の思想をどのように実現していくか、杏村はこの面を自らの社会教育学に期待した。

(5) 第五章では、杏村の社会教育学の成立過程及びその意義について論述している。

第一節では、従来の教育観において教育を特別な領域としているが、杏村は教育を人生や生活の一部として生涯に亘るものとして新たな教育観を提示する。杏村の『教育の革命時代』はまさに教育再編の狼煙であった。そこで第二節のプロレットカルトが浮上してくる。

ポール夫妻によるプロレットカルトは、杏村によって初めてわが国に導入され

た無産者文化論である。プロレットカルトにおけるカルトは教育よりもより広範な教化に近い意味であり、教育という特定の行為でなくとも日常の生活の中で諸個人が与えあう影響の意味であった。そのためプロレットカルトは、学校という制限されたものではなく、全人格的・全生活的なものである。教育という行為を支える広範な領域の前では、教育は特殊な行為であり、学校は教育の一部に位置づけられるにすぎない。これらのことを前提にヨーロッパのプロレットカルトはブルジョアカルトを徹底的に批判しながらエルガトクラシーの政治体制を求めていくものであった。しかし杏村のプロレットカルトは、ブルジョアカルト批判については同意ではあるが、エルガトクラシー文化を志向しない点でヨーロッパのプロレットカルトと基本的に異なるものであった。それは杏村のプロレットカルトの基盤に、彼の人格主義、文化主義、理想主義がおかれていたからである。このような分析は、従来みられなかったもので、著者の新しい解釈として高く評価できる。

第三節では、杏村の提唱した社会教育学について分析した。当代の社会教育は学校教育以外のものとされてきたが、杏村からみればそれは学校教育の延長もしくは補完であり、新たな教育観を考察する際の障害とみた。杏村の社会教育観には以下の三点の特質がある。

第1は、教育概念が社会概念なしには成立し得ないことを指摘し、「教育」は本来「社会教育」と呼ばれるべきであることを論じる。この時杏村は、従来の社会教育という用語とは全く別の意味を表す言葉として「社会教育」を用いる。これは杏村が、「教育」の用語の意味論的成立を追求した結果であった。

第2は、杏村は現象学的に教育の成立を分析する。そこで杏村は、教育が文化、社会、歴史の複雑な構造の中で成立することを説明し、教育の理想もその構造の中で考えられるべきであることを指摘している。とくにそこで注目されるのは彼が歴史概念を導入したことである。これによって杏村は、教育の成立する構造が固定的なものではなく、常に個性的なものであることを提示することになる。現象学という一つの見方からみただけでも、従来の教育観とは異なる教育観が示される。その事実が、従来の教育観の転換を迫ることになる。

第3は、杏村は教育制度が被教育者の心身の漸次的発達に準拠すること、全生涯的であると同時にまた全生活的であること、また教育の自治を得ると同時に教育とそれ以外の生活の部面と緊密に結合すること、教育における自由性と社会的義務性との完全な一致を目標とするべきこと、などを主張する。併わせればその方法は自学的、社会群团的であることや労働と結合することを主張する。

以上から杏村の教育の二元論を否定する自己教育論、人間が人間らしく生きることの自己教育論を社会教育の中核に据えた論を追求している。しかも杏村の社会教育学は、単なる論理的帰結として論じるのではなく、自由大学運動を通じた実践の裏付けをもった新たな教育観であったものと論述した。この点においても、著者の独自の研究とみることができる。

3. 総評

1. 土田杏村の著作集『土田杏村全集』15巻は、杏村の著作・評論の約3分の2程度しか収められていないが、本論文は未見の資料を丹念に発掘収集し、新文献も含めて杏村の一つ一つの論旨を的確にかつ実証的に考察した。

2. 杏村は従来自由大学における彼の実践について主に研究されてきた。一方、杏村の思想的位置づけとしては文化主義者、理想主義者等単発的な評価をうけてきた。本論文では文化主義・人格主義・理想主義及びプロレットカルトのそれぞれの関係を明らかにし、その総体としての杏村の世界観を構成した点で高く評価できる。

3. 杏村の社会教育学の成立を、イ、教育の意味論的成立、ロ、教育の現象学的分析、ハ、教育＝社会教育の実践的背景から、いわば公教育の再編の理論を含んだ現代的意義をもつものとして位置づけている。この面に本論文の意義を認め

ることができる。

4. 杏村の成人教育・社会教育を中心とした教育制度の改革、生活と労働との結合による教育内容の変革、自己教育を核とした教育思想の新しい展開、教権のあり方等による教育条件整備の再編等にみられる教育論を、現代生涯学習論のすぐれた先駆者と位置づけている。この点でも現代教育のあり方に一石を投じるものとして評価される。

5. なお本論文に対しての課題がいくつか指摘できる。第一は、杏村と同時代前後の社会教育論に対するより精緻な比較研究が必要とされること。第二は、杏村自身が引用したヨーロッパ教育論及びその周辺思想の徹底した研究が望まれること。第三は、杏村の研究対象分野は教育学、哲学のみならず、政治、社会、文学、建築学等広汎に亘っているが、本論ではとくに文芸教育論、芸術教育論と関連した展開が求められること、等である。

しかし以上の課題は本論文の中心部分ではなく、著者の旺盛な研究意欲と能力からみて、今後十分克服しうるものと判断される。

以上のことから総合的に判断して、本論文が博士（教育学）の学位に値するものと審査委員全員が一致して認め、報告する。